

会長の挨拶（４）第３．自己教育の運動

ロータリーは個々のロータリアンの精神世界の追及を目的とする自己教育の運動である。ロータリーは何等かの意味において、宗教運動と同一次元に立つ精神的境地開拓の問題と無関係ではない。心に灯を灯し、クラブ活動を通じて深めて行く。その究極にロータリーは魏魏然と聳え立つ。この精神状態を仏教では境地と呼ぶが、この境地を高める作業は各ロータリアン一人ひとりに課せられた責務である。この立場からみるとロータリアンという一般的呼称は、境地の残薄なものから聖者のような境地の者までを包摂する一般的概念であって、ここに認識主体の境地を場として把握せられるロータリーの多様な姿が見られるのである。境地の浅い者にはロータリーは単なる遊びの場としか映らないであろうが、境地の深い者には自己錬成の道場として映ずるであろう。このような立場からロータリアンを分類し、前者を『ロータリー・クラブの会員』と呼び、後者を『ロータリアン』と呼んでいる者もある（ガイ・ガンディカー『ロータリー通解』p14,17）。この立場はロータリアンがクラブに入会したその日から何等かの形で精神的境地の向上を義務づけられ、これが一生涯続けられねばならないから、この精神の質の相違という千差万別な状態をロータリアンという単一概念で結び付けるという興味深い実態を示してくれるのである。そこで、ロータリーは何かと問う各ロータリアンに対して、ロータリーは、それぞれの境地に応じて千変万化のイメージを以て映ずるといふ現象がある。この故に、自己の認識するロータリーがあくまで仮象的なものであるという反省なしにはロータリーを極めることはできないものであろう。しかし、また、ロータリーは一度び一つの悟りに達するや、それを以て足りるといふ宗教世界で考えられる思考過程と同一の特質をもっている。謙虚に求めなければならないロータリーは、かくして自信を以て語るロータリーでもなければならないのである。（小堀憲助著「ロータリー思想の理論構造」より引用）